

推薦の言葉

「日本人ならITナイフ」、この何の脈絡のない言葉も、小野先生のご講演でお聞きすると、妙に説得力を帯びてしまうのは、なぜだろうか。

ご存知のように、小野裕之先生は、ESDを世に広めた、誰もが認めるESDのパイオニアである。70余例ものESD穿孔がほぼすべて保存的加療できたという、先生のてらいのないご発表を聞いて、極めてリスクが高いと耳にしていたESDの導入を1999年に決意した。大阪では初めてということで、導入前に国立がん研究センター中央病院での1週間の見学を勧められ、小野先生から、ITナイフの使い方だけでなく、ESD適応、内視鏡診断、偶発症対策、病理や根治度評価などのトータルマネジメント、さらに術当日は病院に泊まり込むほどの患者さんへの思いやりや責任感など人格的な側面も学んだ。

その後、NBIや拡大内視鏡の普及、デバイスの多様化、ガイドラインの改変などの進歩が積み重なり、ESDに携わるためにはますます包括的にESDに取り組む必要がでてきた。そのことをふまえて2009年ESDの教科書として羊土社から「症例で身につける消化器内視鏡シリーズ 食道・胃ESD」が発刊されたが、今回、より実践的な入門書をめざし、大腸と上部消化管で診断編と治療編に分かれる「基本とコツ」シリーズのラインアップの一環として、「食道・胃・十二指腸ESDの基本とコツ」が企画された。

本書は、小野先生がご意見番となり、ITナイフをメインに使用されている施設のエキスパートの先生方が編集者として実臨床に即した項目をとりあげ、静岡がんセンターを加えた4施設で実際にESDを指導されている先生が執筆された。治療手技や戦略が、内視鏡写真や動画も交えて、簡潔にわかりやすく述べられる一方、企画時に集められた若手内視鏡医からのclinical questionを通して、実臨床でよく遭遇する疑問点が、丁寧に、愛情深く、深掘りされている。また、Expert commentsとして編集者の視点からの助言も加わり、各項が多角的に解説されているため、初級者のみならず、中級者にとっても大変役に立つ内容となっている。

さらには、2021年にガイドラインの出た十二指腸腫瘍治療に関して、新ガイドラインに沿って、cold polypectomyやunderwater EMR、ESD、LECなどが、内視鏡治療法別に詳しく解説されている。

若手の内視鏡医や消化器内科を学ぼうとする先生にはぜひご一読いただき、内視鏡スキルだけでなく、その根底にある「高いレベルの内視鏡治療でより患者さんを幸せにしたい」という小野先生の揺るぎない思いも共有してほしい。

2022年4月

大阪国際がんセンター 消化管内科 主任部長
道田知樹